

## モナドロジーと実在性の探究

稲岡大志『ライプニッツの数理哲学：空間・幾何学・実体をめぐって』

### 第Ⅱ部「空間とモナドロジー」を中心にして

三浦隼暉（東京大学）

#### 1. 第2部の構成について

本発表では、稲岡の著書『ライプニッツの数理哲学』第8章を中心に論じてゆくことになるが、それに先立ち、より大きな議論とりわけ第2部全体の構成について述べておきたい。本書は、第1部の幾何学的記号法に関する検討と、第2部の空間やモナドロジーの検討とに分かれており、その全体の課題について稲岡は次のように述べている。

これら大きく二つに分かれた課題を遂行することで、本書は、ライプニッツは空間に関する議論を実体に関する議論と関連させて考察していたという解釈を提示し、それゆえに、幾何学研究を十分に理解するためにはいわゆるモナドロジーと呼ばれるライプニッツの実体に関する議論についての考察が不可欠であることを示すことになるだろう。(9)<sup>1</sup>

幾何学的研究・空間・モナドロジーの関係性について、稲岡は終始慎重な態度を保っており、自身の見解を大胆に打ち出すということはないように思われる。しかしながら、随所に示される氏の見解を合わせて考えるならば、第6章から第8章にかけての大きな方向性を掴むことは十分に可能であろう。以下、第2部での議論が全体として何を目指して行われたものであったのかを確認する。

第2部は、第6章と第7-8章とに区分することができる。これら前後半のつながりが、第2部における氏の見解を読み取る上で重要となる。第6章では、デ・リージの研究により明らかとなった、晩年のライプニッツと幾何学的記号法との関係が、中期にも拡張されるかどうかを検討される。中期ライプニッツにも幾何学的記号法との関係を読み取ろうとするアーサーの解釈に対して、稲岡は最終的に否定的な判定を下している。だが、このアーサーの立場は単に幾何学的記号法のみに関わるのではなく、ライプニッツの実体論に関する独自の解釈を背景にしていた。「アーサーは、第8章で取り上げるガーバーやリーヴ

---

<sup>1</sup> 以下、引用に際して本文中で（）内に数字のみが示されている場合は、稲岡の著書の頁数を指示している。また、本文中で章と節のみが示されている場合は、稲岡の著書の章と節を指示している。

ィと異なり、ライプニッツは一貫して同一の実体概念として個体的実体概念を保持していたとする」(189注13)というように、幾何学的記号法を中期に認めようとする背景には、実体概念が中期から晩年まで一貫して捉えられていたという解釈が存しているのである。こうして、第6章でアーサーの幾何学的記号法に関する立場を批判した稲岡は、第7-8章で実体概念に関してもアーサーとは異なる立場を提示することとなる。具体的には、ライプニッツ哲学の中期から後期にかけて基礎的存在者が、物的実体からモナドへと移ったとする変遷説(あるいは両方が基礎的存在者として維持されたという両立説)を裏付けるために、モナドロジーの概念史のおよび本質的探究へと踏み出すのである。言い換えれば、なぜ幾何学的記号法は晩年のみに見出されないのか、という問題の背景に、実体概念の変遷、一性から単純性への変遷、といった契機を見出そうと試みているともいえよう。

以上のような文脈のもと、第8章で、後期ライプニッツの単純性の論証は失敗しておりモナドロジーは放棄されるべきだとするリーヴィの見解をある程度認めつつ、稲岡は、別の観点からモナド概念を救う。それによって変遷説(あるいは両立説)の可能性を維持し、1700年代以降の幾何学的記号法とモナドロジーの影響関係を見出そうとするのである。この点で、稲岡の立場はデ・リージのものと近いように思われるが、デ・リージは「テキストの分析によって自分の読みを裏付けることは放棄している」(181)がゆえに、この点をいかに解消するかということが稲岡の課題であると考えられる。

## 2. 観念論的解釈と実在論的解釈における実在性について

さて、ここからは第8章「モナドロジーとはどのような哲学なのか?」の中心として論じてゆく。まず全体を導く糸として実在性について考えておきたい。この章の冒頭で稲岡が指摘しているように「延長を持たず、魂に類されるモナドが世界の唯一かつ究極の構成要素であるという主張は、通常の意味での物体や動物の実在を認めるライプニッツの実在論的傾向との緊張関係を生み出している」(211)。ここで言われる「実在論的傾向」とは、どのような事態を指しているのだろうか。同箇所につけられた注に挙げられているハルツの著書では次のようにまとめられている。

観念論： 宇宙のうちで精神と精神に依拠した対象のみが存在する

実在論： 宇宙において精神でも精神に依拠するものでもない少なくともひとつの対象が存在する<sup>2</sup>

ここで言われるように、一般に精神とその対象に着目すると観念論的傾向を帯び、精神から独立の対象に着目すると実在論的傾向を帯びることになるといえよう。しかし、ライプニッツ哲学において事態はこれほど単純ではないように思われる。というのも、いわば観念論的傾向のうちに実在性が、実在論的傾向のうちに観念性が立ち現れてくる点が、彼の哲学の特徴であるといえるからである。この点について以下で検討しよう。

山本信の論文「実在性について」において、ライプニッツの実在性への問いが、以下に見るように複数の次元に渡るものであったことが指摘してされている<sup>3</sup>。第一に、「本質すなわち実在性の量」として規定された意味での実在性、ここにおいて概念規定それ自体が実在性として捉えられている。中期ライプニッツが提示するような完足個体概念、あるいは後期におけるモナドといったものがこの概念規定の担い手となる。これが第二の実在性に関わることとなる。「彼の存在論の場面においては、物体の「現象性」に対し、実体としての「実在性」は、非物質的な原理にもとづく「モナド」の次元に帰されていた<sup>4</sup>」。稲岡がリーヴィの議論に依拠しつつ第8章第1節で、一性に関する三つのタイプの論証を提示しているが、そのうちいくつかは物的なもの（多数性、寄せ集め）から形而上学的な一性へと遡ろうとする試みであると考えることができよう。延長のうちには物体の独立存在を可能にするような原理を見出すことはできないがゆえに、この道程は要請というある種の飛躍を含んだ仕方でモナド的なものへとたどり着くこととなる。これら第一、第二の意味での実在性を求める探究は、物的なものを前提として始めるという点では実在論的な開始点を持ちつつも、最終的にあらゆる現象をモナドへと還元するという意味で観念論的なものとなる。

他方で、第三の実在性について山本は次のように述べている。「ところがそのライプニッツが「現象の実在性」を問題にし始めるや、認識論的な意味での「観念論-実在論」の枠組みにひきこまれ、同時に、実在性に関する問題そのものの意味を変える方向を打ち出すのである<sup>5</sup>」。第三の実在性として挙げられた現象の実在性はふたつの意味で与えられる。一

---

<sup>2</sup> Hartz 2007, 6.

<sup>3</sup> Cf. 山本 1980, 194-195.

<sup>4</sup> 山本 1980, 194.

<sup>5</sup> *ibid.*

方で、意識に対して直接与えられる経験、自我の（間接的ではあるが<sup>6</sup>）確固とした経験から実在性を引き出している。山本が『ライプニッツ哲学研究』において「内的経験におけるこの自我の自覚は [……] 自発的作用の主体としての個別者の実在性を主張する、絶対的根拠<sup>7</sup>」と述べているように、認識論的な側面から第一に与えられる実在性は強力なものではあるが、極めて観念論的なものであるともいえよう。ライプニッツは、自我との類比を通して、この独我論的実在性を他の主体にも拡張してゆく。こうした実在性を保持する自我に依拠する形で、他方、物体现象の実在性も語られてゆくことになる。この文脈においては、実在的現象は想像的現象との対比で扱われ、実在的な物体は「よく基礎づけられた現象」としての身分を与えられることとなる。個々の自我が外界から得てくる物体现象の規則性や法則性といったものが、それを想像的なものから切り離し、実在的に基礎づけられた現象として保証するのである。こうして認識論的側面から出発する探究は、独我論的自我の観念論から、法則そのものの実在性を求めるような実在論的な（あるいはむしろ超越論的観念論的な）側面へと向かってゆく。

以上のように、存在論的探究は、所与の物体现象からその背後に潜むモナド的実在性へと向かうものであるがゆえに、実在論から観念論への運動である一方で、認識論的探究は、自我から物体现象の規則の実在性へと向かうものであるがゆえに、観念論から実在論（あるいは独我論的観念論から超越論的観念論）への運動となる。観念論的傾向と実在論的傾向との間の「緊張関係」は、単にテキストを取り巻く様々な事情による筆のすべりから生じてきたものというよりも、ライプニッツの実在性をめぐる探究の枠組み一般から生じてきたものであるといえよう。

第8章の最後でまとめられている「ライプニッツの試みは、基礎的存在者の特定ではなく、物体や物的実体や単純実体といった異なる種類の存在者の間に成立する還元・構成関係の解明にあるとする解釈」（232）は、以上のような実在性の探究という大枠と一致する。というのも、そのような枠組みにおいては基礎的存在者をモナド（観念論）とするか物的実体（実在論）とするかの最終的な決定が重要なのではなく、両方向からの運動によって物体现象の実在性を基礎付けることこそが求められるからである。物体とモナドの間の「還元・構成関係の解明」は、そのような運動の一契機を明らかにするものとして理解することができる。自我から発出して類比的な仕方でも物体现象のうちにも実在性を見出

---

<sup>6</sup> ライプニッツは自我の反省を間接的なものとして理解している。「感覚は反省の素材を私たちに提供しますが、もし他の何らかの事物、つまり感覚がもたらす個別的事実について思考しないとすれば、私たちは思考について思考することさえしないでしょう」（『人間知性新論』第2巻第21章第73節, A VI, 6, 212; I, 4, 251–252.

<sup>7</sup> 山本 1953, 357.

そうとする方向性と、物体現象とモノドの間に還元や構成の関係をおくことで実在性を見出そうとする方向性とは、同じ目的をもった二方向の道程なのである。

先に引用したハルツの観念論・実在論の枠組みで、ライプニッツ哲学をどちらか、あるいは両方に属するものだと捉えようとするのは、ライプニッツ自身の問題意識から足を踏み外すことにつながりかねない。ライプニッツが求めたのはあくまで物体現象の実在性を基礎付ける関係であり、基礎的存在者はその探究のうちに登場する個別のアクターにすぎない。それゆえ、物的実体の問題に関しては、物体そのものが実在的であるかどうかの問題なのではなく、物体の実在性がどのように「根拠づけ」(232)られるのかを問うことが中心的な課題であったというべきであろう。言い換えれば、物体の実在性の条件を探究することが、モノドロジーをめぐってなされた哲学的課題であったのである。

### 3. 一性と単純性の論証について

以上で見たような大きなプロジェクトを構成する一部分として、真に一なるものや単純実体の存在論証は重要な意義を有している。稲岡が第8章第1-2節においてリーヴィの整理に従い提示しているのは、そのような存在論証の内実である。そこでは、これまで十分に区別されてこなかった一性の論証が異なる三つの論証として再定式化された後、単純性の論証との関係が批判的に検討されることとなる。具体的には、基本となる一性の論証は「一性の原理の論証 (PUA)」「借りてきた実在性論証 (BRA)」「多数性論証 (MA)」であり、後者ふたつの拡張形として単純性の論証が示されている。以下、参考のために各論証を引用しておこう。

#### PUA (213)

1. 何かが実体であるならば、それは真に一である、ないし、一性を持つ。
2. 物体はすべて部分を持つ
3. 部分を持つものが一性を持ちうるならば、それは一性の原理を持つ。
4. 延長には一性の原理を持つものはない。
5. よって、物体が実体であるならば、それは一性の原理を持つ。
6. よって、物体が実体であるならば、それは延長のみから構成されない。

#### BRA (214<sup>8</sup>)

1. 多くのものに分割可能なものは、多くのものから成る寄せ集めである。
2. 寄せ集めはその実在性を構成要素から借りる。
3. 借りられていないいかなる実在性もない、というのは不合理である。
4. よって、多くのものに分割可能なものは、寄せ集めではない構成要素を持つ。

#### MA (216)

1. 存在するものは一性を持つ。(一性と存在の互換性)
2. xが複数あるならば、そのうちのひとつであるようなyが存在する。  
(複数が単数を仮定する)
3. よって、多くのものが存在するならば、一性が存在する。

これらの論証のどれにおいても、論証外の前提が置かれて初めて一性の原理の存在論証となっている点が特徴的である。「PUA は実体である物体が存在することを仮定して、一性を持つ合成体に対して、一性の原理として機能する非延長的な何かの存在を論証する」(216) のであり、「MA は多であるものの存在を仮定している」(216)。また、稲岡は指摘していないように思われるが、BRA においても同様に、現に多くのものへと分割されているものが前提されていなければ、実在性の貸付元であるところの「寄せ集めではない構成要素」の存在論証としては機能しない。

これらの前提が重要になるのは、置かれた前提によって求められる一性の内実が異なるものになるからである。ここで再び山本の研究を参照するべきであろう。山本は「アルノ一宛書簡」における一性をふたつに区分している。第一に、集合体に対して一性を与えるもの、例えば動物身体を統一するものとしての一性に対しては、「全体的あるいは統一的一性<sup>9</sup>」という名を与える。第二に、全体的一性をもたない大理石のような物体が有する実在性のものとなっている一性に対しては「要素的あるいは単位的一性<sup>10</sup>」という名を与え

---

<sup>8</sup> Levey 2012, 104. 一部訳を変更している。

<sup>9</sup> 山本 1953, 262.

<sup>10</sup> 山本 1953, 263. ここで山本は中期のテキストにふたつの一性を読み取っている。さらに、ラトーによれば、後期のモナド概念に関しても同様の区別を認めることができる。「モナドとは、いわば「上から」「高いところから」存在するものを一として構成し(全体的ないし総体的一)、いわば「下から」「低いところから」真に存在するものを基礎付ける(最終的ないし要素的一)ものなのである。一とは、構成するもの(伝統的には実体形相に割り当てられてきた機能)であると同時に、複合された全体においては、「理念的」分解において分割できず分析の限界である「部分」(アトム)として構成されるものなのである」(Rateau 2015, 188)。

ている。これら一性の内実的差異は、置かれた前提、出発地点の選択の差異から生じてくるものである。物的実体という統一された物体の存在を前提すれば、それを可能にするところの全体的一性が要請され、物体现象（多なるもの）の存在を前提すれば、それを可能にしているところの要素的一性が要請されるのである。

以上のような山本の分析を、リーヴィや稲岡が提示している先の三つの論証との関係で考えるならば、PUA は物的実体を前提として全体的一性を取り出す論証であり、BRA や MA は多なるものや寄せ集めを前提として要素的一性を取り出す論証であるということができるよう。もちろん、第 8 章第 2 節で示されるように、一性と単純性とを同一視することはできないにしても、どちらにせよ還元と構成の関係によって実在性を基礎付ける作業であることに変わりはないだろう。PUA は、物的実体という実在論的前提から出発して全体的一性という観念論的帰結へと向かう探究であり、MA や BRA は、単なる現象としての物体（寄せ集め、多なるもの）という観念論的前提から出発して要素的一性へと向かう探究だといえる。後者に関しては、中期であれば実在論（物的実体による実在性）へと向かう探究となるし、後期であれば観念論（モノドによる実在性）へと向かう探究となる。

とりわけ要素的一性の探究における実在論的傾向と観念論的傾向は、稲岡が指摘している還元概念の内実の変遷に対応している。「中期から後期にかけて、ライプニッツが物体のモノドへの「還元」として示す内容は、物的実体が寄せ集めと形相からつくられるという構造から、単純実体から結果するという構造へと推移していることが推察できる」(228)。要素的一性の探究は、時期によって観念論・実在論の両傾向をもつことになるが、それを還元・構成という観点から見れば、どちらも物体の実在性の基礎づけのための探究として理解可能なのである。

#### 4. 物的実体〈から〉モノドか、物的実体〈と〉モノドか

第 8 章第 3 節では、フェミスターが導入した二種類のモノドが紹介がなされている。魂と第一質料との合成としての「デ・フォルダー・モノド」（通常の意味でのモノド）と、物的実体を持つ魂としての「ベルヌイ・モノド」（すなわち物的実体）とである。稲岡がこれについて「観念論的デ・フォルダー・モノドと物的実体の二つのタイプのモノドがあるような印象を与えてしまう」(223) と危惧しているように、両者をモノドと名付けるフェミスターの方策は適切ではないように思われる。とはいえ、後期ライプニッツが、受動的力と能動的力の合成体としてのモノドと、有機的身体と支配的モノドとの合成体とし

ての物的実体との両者に対する肯定的立場をとっていたと考えること、つまり中期ライプニッツが認めた物的実体概念が（多少の変遷はあるとしても基本的には）維持されたまま、そこにモナドが付け足されたと考えることは可能であろう。これを両立説と呼ぶことにしよう。

この両立説は稲岡の立場とどのような関係にあるのだろうか。氏は、中期から後期にかけて、ライプニッツが採用した基礎的存在者に関して、物的実体からモナドへと変更があったという変遷説の立場をとっていると思われる（とはいえ、両立説も否定はしていないように見える）。「本章の結論としては、1700年以降の単純実体の存在論証は、基礎的存在者の変更に対する形で、物体と基礎的存在者であるモナドとの間の還元・構成の構造を明示化するためになされたものである」（224-225）。ガーバーやリーヴィらは、基礎的存在者の特定をライプニッツの課題と考えることで、よりラディカルな変遷説を唱えていたが、彼らは基礎的存在者の変更の動機を十分に説明していない（cf. 223）。それに対して、稲岡は還元・構成に着目することで、その動機に説明を与えることを可能にしているといえる。というのも、それによって物的実体からモナドへと基礎的存在者を変更した理由を、先から述べている実在性の探究という大枠で捉えることが可能になるからである<sup>11</sup>。

しかしながら、大きく見ればガーバーやリーヴィらと同様に変遷説をとる稲岡の立場において、生物を実体として認めるような後期ライプニッツのテキストの存在はどのように理解されることになるのだろうか。あくまでも基礎的存在者の変更があったとする変遷説においては、晩年まで生物実体（物的実体）を論じようとしたことはライプニッツの立場の「揺れ」（201）、あるいはモナドロジー的探究という基本路線からの逸脱として解釈されることになるだろう。しかし、モナドと同時に、物的実体ないし生物実体をも同時に基礎的存在者として捉える両立説の可能性はないのだろうか。後期ライプニッツのテキストに盛んに現れてくる生物実体への言及はモナドに対する言及と同じ使命を担っていたと考えることはできないのだろうか。

ただし、この両立説は、ガーバーやリーヴィとは対立的であるにしても、稲岡の立場とはそれほど遠くないようにも思われる。稲岡自身、中期から後期にかけての「還元」の内実をまとめながら、その両時期の立場について「この二つの見解は排他的ではない。むしろ、中期の見解にさらに検討を加えたものが後期の見解であると整理することもできる」（228）と述べている。とはいえ、もし後期ライプニッツが積極的に両者の両立を考えていたとすれば、なぜ単純実体の論証を前面に出しながら、物的実体に対するコミットメン

---

<sup>11</sup> 実在性の探究という大枠でみることによって、基礎的存在者の変更は、異なる視点から物体の実在性を確保するという取り組みとして理解されうる。

トを維持しなければならなかったのか、という点には答えなければならないだろう。積極的な両立論については、稲岡はあくまで慎重な態度であり、立場の変化の詳細に関しては「今後の資料の公刊を待つほかない」(231)としている。

このような積極的な両立論へのコミットメントがありうるとしたら、その動機は何か。この点に関して、本発表ではひとつの仮説を提示してみたい。それは先ほどから論じてきている実在性の探究に由来するものである。先にあげたハルツの観念論や実在論(本発表原稿3頁目)といったものは、あくまで基礎的存在者の外延に関するものであった。モノドだけを真の存在者とするのか、より拡張して物的実体をも真の存在者として認めるのか、このような存在者の領域に関する対立として、それは理解されうる。このような二者択一的な見方だけでは、基礎的存在者としての物的実体をモノドと並行して維持することの動機を十分に見出すことができない。むしろ、観念論的立場や実在論的立場が協働して同じ対象すなわち実在性を目指していたという点に、積極的な両立論の動機があるのではないだろうか。

そのような仮説のもとで、物的実体と実在性の探究との関係を以下のように考えることができる。経験的対象の規則性や法則性といったものによって与えられる実在性について、ライプニッツは次のように述べている。

たとえこの全人生が夢でしかなく、目に映じた世界が幻影に他ならないと言われようとも、理性を十分に働かせて決して欺かれることがないならば、私はこれが夢だろうが幻影だろうが十分に実在的だと言おう。(GP VII, 320; I 9, 66)

このように言われた実在的な現象は、単に空想的であるような現象とは区別され、経験において与えられる意味での実在性を構成することとなる。そして、経験される規則的なものは、その最たるものとして有機的身体へとたどり着くことになると考えられる。稲岡が提示する「還元」の転換期とちょうど同時期の1700年前後に、集中的に新たな展開を迎えるライプニッツの有機体論の最大の眼目は、生物身体において無限の機械を見出すこと、言い換えれば最大の規則性を見出すことであった<sup>12</sup>。ただし、経験的なものの側から出発するこのような実在性の探究は、有機的身体という特殊な物体現象のうちに実在性を局在化することを可能にはしても、その対象が延長的物体である限り、一性や単純性そのものへと到達することはないのである(PUAの4つ目の前提「延長には一性の原理を持つもの

---

<sup>12</sup> 三浦 2018 において論じたように、ライプニッツの有機体論とは、生物身体をどこまでも機械になっているものとみなす「理念的機械論」だといえる。

はない) <sup>13</sup>。そこで、還元・構成という操作によって物体に結びつけられた単純実体すなわちモノドが重要な意味を持つこととなる。経験によって有機的的身体に局在化されたモノドへと還元してゆく道と、そこから再び構成する道とが立ち現れてくるのである。BRA や MA によって示されたように、有機的的身体はこの還元・構成操作によっても実在性を得るのである。こうして、経験主体-有機的的身体間での認識論的実在性と、有機的的身体-モノド間での存在論的実在性という二つの実在性の探究が交差するところで、有機的的身体は物体的実体としての身分を得ることになる。

以上のように、積極的な両立論を主張しようとするならば、観念論・実在論のどちらかの立場にライプニッツが属していたと捉えるのではなく、観念論や実在論へのコミットメントが実在性の探究というひとつの目標において協働するものであったという観点から考えるべきなのである <sup>14</sup>。そのような観点から捉えるならば、稲岡の「ライプニッツの試みは、基礎的存在者の特定ではなく、物体や物体的実体や単純実体といった異なる種類の存在者の間に成立する還元・構成関係の解明にあるとする解釈」(232) は、ライプニッツの一大プロジェクトのうちでの存在論的実在性の構造解明として位置づけることができる。そして、それゆえに、稲岡の解釈は積極的な両立論とそれほど遠くはないと言えるのである。

## 文献

- Leibniz, *Leibnizens mathematische Schriften*, hrsg. C. I. Gerhardt, A. Asher und H. W. Schmidt, 1849–1863 (Nachdr., Olms, 1971). (略記：GP 巻数, 頁数)
- *Sämtliche Schriften und Briefe*, Akademie Verlag, 1923–. (略記：A 系列, 巻数, 頁数)
- 『ライプニッツ著作集』全 10 巻, 下村寅太郎・山本信・中村幸四郎・原亨吾 (監修), 工作舎, 1988–1999. (略記：I 巻数, 頁数)

Hartz, G. A. (2007), *Leibniz's Final System: Monads, Matter and Animals*, Routledge.

Levey, S. (2012), On unity, borrowed reality and multitude in Leibniz, *The Leibniz Review*, 22, pp 97–

---

<sup>13</sup> こういった考え方は、もの自体に到達することのない現象という意味で、デ・リージの「カント的な現象主義をライプニッツに読み込む」(224) という解釈と一致する。

<sup>14</sup> ここまでの議論をふりかえると、ライプニッツ哲学の中心にあるのは「物体」なのではないかと思われるかもしれない。しかし、注意すべきは、有機的的身体という物体を経験する主体もまたモノド概念へと回収されてゆくということである。そこにあるのは、経験主体-物体-モノドといった三項ではなく、あくまでモノドと物体なのである。それゆえ、認識論的実在性にしろ存在論的実在性にしろ、どちらも最終的にはモノドと物体の関係において実在性を基礎づけるための探究だということになる

Rateau, P. (2015), *Leibniz et le meilleur des mondes possibles*, Classiques Garnier.

稲岡大志 (2019), 『ライプニッツの数理哲学：空間・幾何学・実体をめぐって』 昭和堂.

檜垣良成 (2015), 「Realität の二義性：中世から近世へと至る哲学史の一断面」『近世哲学研究』 19, 近世哲学会, pp. 1–34.

三浦隼暉 (2018), 「後期ライプニッツの有機体論 —機械論との連続性および不連続性の観点から—」『ライプニッツ研究』 5, pp. 100–118.

山本信 (1953), 『ライプニッツ哲学研究』 東京大学出版会.

— (1980), 「実在性について」 沢田允茂・大出晁・中山浩二郎・有働勤吉 (編) 『科学と存在論』 思索社, pp. 186–207.